様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３７４０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０７８２

研究課題名（和文）『日本書紀』及び国史の時間論的研究

研究課題名（英文）Chronology of "Nihon Shoki" and national histories

研究代表者
細井　浩志（HOSOI, Hiroshi）

活水女子大学・文学部・教授

研究者番号：３０２６３９９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：『日本書紀』の暦日を研究する方法論を示した。つまり５世紀以前の日付をもつ記事は、一部の例外を除いて、作為性が強く、編者が後につけたものか、使用した資料に問題がある。またそのことと編者による記事の年次の設定や、日付の干支への換算は区別が必要であり、後者は編纂の最終段階（720年の天皇への撰上直前）に行われたことを指摘した。なお５世紀以前の倭国や百済では、豪族層でも年月までしか認識していないことを論証した。
なお陰陽道の成立過程や737年の疫病などについて、通説の変更を提案した。

研究成果の概要（英文）：A methodology is presented for studying the calendar days of "Nihon Shoki". With a few exceptions, dates of articles in this text prior to the 5th century are highly suspect, either as later editorial fabrications, or due to problems with the materials the compilers used. It is then necessary to distinguish between such cases and the annual establishment of articles by the compilers, or the conversion of dates to the zodiac in the final stages of compilation (just before the presentation to the Emperor in 720). It is argued that in Wa (Old Japan) and Baekje (Old Southwest Korea) before the 5th century, even the most powerful groups recognized only years and months.
In addition, changes are proposed to common theories about the process of formation of the Yin Yang way and the plague of 737 etc.

研究分野：日本史学　とくに古代の歴史意識・暦・時刻・陰陽道

キーワード：日本書紀　六国史　暦　百済　呪禁師　陰陽道　亀卜　疫病

１．研究開始当初の背景

本研究は、事業者がこれまで行ってきた天文・暦データを利用しての六国史編纂に関わる研究と、時間制度及び時間意識に関わる歴史学研究（特に古代の暦・陰陽道に関するもの）の進展を前提としている。ちょうど歴史学においても時間への関心が高まったこともあり、六国史に見られる日本のナショナリズムと歴史意識の発生を、日本人の時間意識という観点から解明する時期に到ったと言える。このことが研究の主たる背景であった。

２．研究の目的

日本古代史研究のための基礎史料である六国史は、「日本」という国が成立した律令国家期に編纂された。従って六国史は、日本における「歴史」または歴史意識の誕生ということができる。当然、この歴史意識は日本国としてのナショナリズムの形成と深い関わりがあるはずである。また律令国家の成立期は、暦が倭国に普及し始めた時期でもある。歴史は暦を前提として事実を時間的に配列することで成立する。こうした前提で六国史、特に『日本書紀』の性格を、暦を中心とする時間意識という視角から解明する。

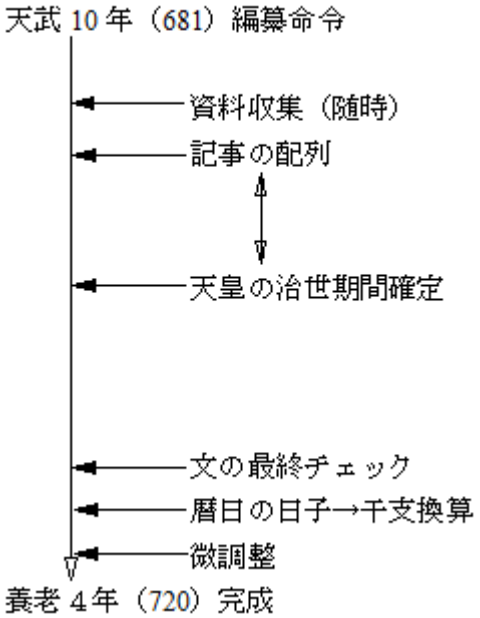
３．研究の方法

（1）木簡・金石文等の史料で、律令国家成立以前（7 世紀以前）の倭国における暦日の浸透度を、時期・地域を意識しながら整理する。
（2）『日本書紀』の年月日の記事を分類し、この暦日付与の根拠が何か（編纂段階の推算か、その場合はどの編纂段階でのものか、原資料があるのか、あればどのような原資料か）について、本書の内的整合性、(1)で扱った金石文・木簡・海外史料・出典などとの比較で考察する。
（3）以上を踏まえて『日本書紀』（及び国史一般）の編纂過程を解明する。
（4）(1)・(2)を踏まえ、(3)と並行して、倭国・日本国における、暦日意識・暦に関わる制度の発展について考察し、(3)の考察に資する。

４．研究成果

(1)蒐集した古代木簡の暦日データ（一部金石文も含む）を古代末期まで補充して年月日順に集成した（図書②）。今後の基礎データとして使えるものである。
(2)現段階の『日本書紀』研究を総括し展望を示した（図書①）。本書は研究最先端の成果と言える。また自身は「日本書紀の暦日について―雄略紀を中心に」を執筆し、『日本書紀』の暦日研究のための基本的な方法論を提示できた。つまり『日本書紀』の暦日のうち、５世紀以前の日付をもつものは、一部の例外を除いて、編者により後につけられたものか、使用した原資料の問題（７～８世紀に氏族が提出した家記類における作為など）であり、そのことと編者による記事の年次の設定や、日付の換算（日子→干支）は区別が必要で、後者は編纂の最終段階（養老４年＝720年の撰上直前）に機械的に行われたことを論証した（学会発表③・図書①）。その前提として、５世紀以前の倭国では豪族層でも年月までしか認識していなかったこと、さらには倭国に暦の面でも影響を与えた百済においても事態は同様であったことを論証した（学会発表②・図書①）。従来は史料上の制約があるため、『日本書紀』の具体的な編纂過程に踏み込む研究は多くはなく、特に暦日がいつ与えられていたのかは曖昧であったので、本研究はその点を明確にしたものと言えよう。
これをもって、当初の主たる研究目的は達成されたものと考えている。

『日本書紀』編纂過程のイメージ



(3)「国史の編纂―『日本書紀』と五国史の比較」（学会発表④・図書⑤）で、日本国誕生に深い関係を持つ歴史書として『日本書紀』をとらえる視角を提示した。つまり従来の倭国における断片的な歴史をもとに太古より統一された日本国としての歴史を創出し、諸氏族の歴史を調整して貴族官人層に共有されうるものとした点が重要であることを明確にした。また編者間や編者と天皇との関係にも考慮すべきことを示した。『日本書紀』は天武天皇の史書編纂事業として始まり、天武皇子の舎人親王を最後の編纂総裁として完成した。つまり撰進時の元正天皇を始めとする草壁皇子系の皇統とは利害の対立があった可能性が高く、それが記述にも反映している形跡がある。よって権力者が一枚岩だ

という前提での“『日本書紀』の歴史観”という捉え方は危険であることを示した。さらに原資料と編纂の関係を考慮すべきことを提言した。この点は先行研究でも部分的に指摘されているが、ここでは律令国家成立以前の政府の文書が各天皇（大王）の宮に保管された可能性が高く、例えば壬申の乱による大津宮の荒廃が、斉明・天智朝の記述に影響をしていることをも指摘した。そして暦日の浸透と『日本書紀』の関係にも言及しており、最終的な研究成果（図書①）の直接の前提となっている。

(4)暦やそれに関わる百済伝来の諸技術に関しても成果を得られた。

ａ「七、八世紀における文化複合体としての日本仏教と僧尼令―卜相吉凶条を中心」（図書⑦）では、律令国家成立以前の暦などの技術がなぜ仏僧に担われたのかを、その（特に江南系の）漢文読解能力、大数を扱いうる計算能力、仏教行事における暦の必要性、護国経典における占星術（その前提としての七曜暦）の必要性、およびこれらの教育の場としての寺院という観点から一貫した説明を与えることができた。これをふまえて、大宝期（８世紀初）の仏僧と陰陽寮官人の分離の理由を、(ア)仏教の純化により仏呪の威力を高めようとしたこと、(イ)道教排除との関係、(ウ)方術官人の多忙、(エ)仏僧の政治利用の予防（新川登亀男説の追認）、と推測した。

ｂ「対馬の亀卜―その概説と日本への亀卜伝来に関する考察」（図書⑥）では、対馬の亀卜の技法の概要を示し、それが百済系の技術であること、6 世紀のヤマト政権が大陸出撃及び東国進出のため、その前線といえ、かつウミガメの捕獲が可能な壱岐・対馬・伊豆に亀卜を行う卜部を設置したことを論証した。

ｃ「疾病と神仏―律令国家の成立と疫病流行および疾病認識」（図書④）では、６世紀に百済と倭国との交通が頻繁となり、その結果外国使節と疫病流行を結びつける観念が生まれ、この結果、病因を新占術で占う卜部に解除や疫病防遏の職掌が与えられた可能性を提示した。さらに律令国家の成立による交通網の整備が疫病の大流行をもたらし、同時に在来の神霊による病因論に加えて大陸伝来の種々の病因論（陰陽不調・因果応報）が貴族層に広がったこと、天平９年（737）の疫病流行を防げなかったことが、卜部に替わり呪禁師（後には陰陽師）が疫病防遏の主役となった契機である可能性をも示した。また律令国家期の疾病発生の構造を明らかにし、加えて連携研究者の吉井学氏の教示により、従来は天然痘または麻疹とされていた天平９年の疫病が腸管症状や気温が上がってからの急速な罹患者の増加の様相からチフスと見る方が妥当なこと、また慶雲２年（705）の疫病が天然痘と見られることを指摘した。

ｄ「陰陽道と東アジア―国立天文台の変質としての陰陽道の形成」（図書③）では、暦との関連で、陰陽道の成立について、a～ｃや以前の科学研究費補助事業の成果（「陰陽道の成立についての試論―呪禁師との関係と「初期陰陽道」概念について」吉川真司・倉本一宏編『日本的時空観の形成』思文閣出版、2017 年）などとあわせて、特に従来は注目されていなかった呪禁師との関係を考慮することによって、一貫した見通しを示すこととなった。また陰陽道は 9 世紀後半～10 世紀に成立するとした通説に替え、8 世紀後半～9 世紀前半に「初期陰陽道」として成立し、9 世紀後半～10 世紀は暦道・天文道が陰陽道に取りこまれる時期（「平安期朝廷陰陽道」の成立）であるとする、陰陽道史観の大きな変更を提案した。またこれに基づいて、従来は理由がはっきりしなかった賀茂氏・安倍氏による陰陽道支配が形成された経緯についてもおおむね明らかにした。

なお律令国家期の年号と暦の関係（学会発表①）、『続日本紀』後半の編纂過程（学会発表⑤）についても、解明の手がかりを得たので、今後、研究を進める予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計５件）

①細井浩志，年号と時間意識について―古代を中心に，歴博国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」，2017 年

②細井浩志，古代日本の暦・天文の学における百済の影響，第 7 回日韓科学史セミナー，2017 年

③細井浩志，『日本書紀』の暦日について，「『日本書紀』編纂史」研究会，2017 年

④細井浩志，国史の編纂―『日本書紀』と五国史の比較，国史編纂シンポジウム，2015 年

⑤細井浩志，光仁・桓武朝における『続日本紀』後半の編纂について，九州史学研究会大会，2014 年

〔図書〕（計７件）

①遠藤慶太（編）・河内春人（編）・関根淳（編）・細井浩志（編）・その他 19 名，日本書紀の誕生，205-238 頁，八木書店，2018 年

②細井浩志，古代木簡における暦日記録目録（稿），80 頁，活水女子大学，2018 年

③田中史生（編）・金子修一・赤羽目匡由・山崎覚士・近藤剛・西村さとみ・浜田久美子・細井浩志・他 12 名，古代日本と興亡の東アジア（古代文学と隣接諸学１），182-212 頁，竹林舎，2018 年

④安田政彦（編）・中西康裕・京樂真帆子・

丸山裕美子・中村直人・小村宏史・小林健彦・内田美由紀・芝波田好弘・大田敦子・大江篤・若井敏明・細井浩志・他５名，自然災害と疾病（生活と文化の歴史学 8），322-346 頁，竹林舎，2017 年

⑤大津透（編）・佐藤信（編）・細井浩志・他 8 名, 岩波講座日本歴史第 21 巻史料論, 43-68 頁，岩波書店，2015 年

⑥高野晋司・安蒜政雄・橘昌信・川道寛・岡本東三・小畑弘己・清水宗昭・甲元眞之・中尾篤志・常松幹雄・尾上博一・村子晴奈・木崎康弘・宇野愼敏・堀江潔・細井浩志・他 13 名，高野晋司氏追悼論文集，189-198 頁，高野晋司氏追悼論文集刊行会，2015 年

⑦新川登亀男（編）・古井龍介・ファム=レ=フイ・侯冲・南東信・川尻秋生・石見清裕・葛継勇・李成市・森美智代・大島幸代・長岡龍作・三上喜孝・長坂一郎・黒田智・工藤元男・森由利亜・高橋龍三郎・細井浩志・山口えり,仏教文明と世俗秩序 国家・社会・聖地の形成,539-568 頁，勉誠出版，2015 年

〔その他〕
ホームページ等
図書②をデーターベースとして公表することを検討中

６．研究組織
(1)研究代表者
細井　浩志（HOSOI Hiroshi）
活水女子大学・文学部・教授
研究者番号：30263990

(2)連携研究者
吉井　学（YOSHII Manabu）
活水女子大学・健康生活学部・准教授
研究者番号：30714828

(3)研究協力者
菊池　達也（KIKUCHI　Tatsuya）
京泉　勇平（KYOIZUMI　Yuhei）
立花　大輔（TACIBANA　Daisuke）
田村　杏士郎（TAMURA　Kyoshiro）